



「生きる」ということ・・・

「図書館だより2月号」で「私の読書は『青春の門』から始まりました！」という文章を書きましたが、今回は、懲りずにまた五木寛之さんの『生きるヒント』『大河の一滴』『夜明けを待ちながら』等の珠玉のエッセイの中に掲載されている話を紹介します。実はこの話は、生徒のみなさんが北島中学校に入学する前の平成29年7月の「校報」でも紹介したものです。

『大河の一滴』（1998年 幻冬舎）から「命を支える見えない力」と題して綴られた文章を今回は要約して紹介します。コロナ禍の中、困難な時代を生きていく中で、再びこの本が注目され書店に並び、多くの人が手に取って読んだようです。私も生徒のみなさんに読んで欲しくて、昨年9月「私のおすすめ本」として図書室前に掲示してもらいました。それでは、ほんの一部ですが要約したので、読んでみてください。

アメリカのアイオワ州立大学の、生物学者リットマーという博士が、たいへんおもしろい実験をしたようです。それは、三十数センチ四方、深さ五十センチぐらいの木箱のなかに砂を入れて、一本のライ麦の苗を植え、水をやりながら数か月育てると、木箱の砂の中にいったいどれほどの長さの根を張りめぐらすのかを実験して確かめたというのです。

目に見える根の部分は全部ものさしで測って足していきます。根の先の根毛とかいう目に見えないくらいの実に細かな根については、顕微鏡で細かく計測したようです。木箱の中の全ての根の長さを足すとどのくらいになったのか？

驚くことになると、その根の長さの総長、総延長数は11,200キロメートルに達したというのです。

そこで、作者の五木さんは、次のように述べています。

「命をささえるというのは、実にそのような大変な営みなのです。」と。

ここで改めて、「生きる」ということを考えてみたいと思います。私たちは、生まれた直後から母親や家族の愛情に包まれ、支えられ、成長してきました。そして、無意識のうちに足下に張りめぐらされた根から、人間として成長するための栄養分やエネルギー（愛情・他者からの支え、等）を吸収してきたわけです。人間は、決して自分一人だけで生きているわけではありません。家族や友達、学校、地域、職場等、多くの人との関わりの中で生活しながら、生きているのです。今日まで生きてきたのです。

私たちは、日々の暮らしの中で感謝の気持ちを忘れることなく、これからの生活及び人生を「一本のライ麦」に負けないように生きていきたいものです。地に足をつけ、しっかりとした根を張り、いろいろな栄養分やエネルギーを吸収し、悔いのないように生きていきたい、生きなければいけない、と私は考えます。



3年生のみなさん、公立高校一般選抜まであとわずか！ガンバレ！

公立高校の一般選抜の定員が発表されました。入学願書の提出、そして一般選抜（学力検査、面接等）が迫る中、貴重な時間をどのように過ごすかで、検査当日の迎え方、気持ちの持ち方が決まってくるように思います。自信たっぷり検査に挑む人もおれば、そうでない人もいますかと思えます。一日一日を無駄なく目標目指してまっすぐに突き進めることを期待しています。1、2年生のみなさんは、まだまだ先の話だと思いませんか？すでに受検の準備期間に入っています。今から毎日こつこつと積み上げて、余裕を持って受検を迎えられるようにしたいものですね。

しぶさわえいいち

渋沢栄一 「夢七訓」・・・今年、流行しそうです！

夢なき者は理想なし。理想なき者は信念なし。信念なき者は計画なし。計画なき者は実行なし。
実行なき者は成果なし。成果なき者は幸福なし。ゆえに幸福を求むる者は夢なかるべからず。